

大腸がん検診、血便検査だけで大丈夫？

豊平区福住2条1丁目
医療法人社団慈昂会 福住内科クリニック
院長 田中 浩

国内の大腸がんによる死者数は増え続け、この半世紀でおよそ10倍になり、今では年間約4万人が亡くなっています。特に女性は、がんによる死亡者のうち大腸がんの割合が1位となっています。

大腸がん検診として、家で簡単にできる便潜血反応検査（血便検査）2回法がよく行われています。大腸がんが出血しやすいことから、便に含まれる微量の血液を検出して大腸がんを発見しようとするもので、一度でも陽性が出れば内視鏡検査が必要になります。血便検査を行うと大腸がん患者の死亡数が2〜3割少なくなるという報告もあり、がん検診

の手段として大変有効であることが証明されています。

では、血便検査の結果が2回とも陰性なら「大腸がんではない」のでしょうか？ 残念ながら答えは「否」です。1回ごとの血便検査では、早期がんで約50%、進行がんでも10%ほどが見逃されるといわれています。大腸がんがあっても常に出血するわけではないですし、出血していても便の取り方によって陰性になる場合もあるからです。

ほかの部位のがんと同様、大腸がんも40歳を過ぎると増えてきて、ピークは60歳代です。一方で大腸がんは、早期に発見して治療すれば予後（病状

の見通し）が大変良いがんとしても知られており、特に粘膜内に限局した早期がんは内視鏡を用いた切除で完治させることができます。

以上のことから、血便検査の結果がどうであれ、早期発見のためには40歳を過ぎたら定期的に大腸内視鏡検査を受けることをお勧めします。内視鏡を肛門から盲腸まで挿入し、大腸全体を観察する検査です。現在では内視鏡機器の発達と技術の進歩により、ほとんど苦痛なく短時間で終わる検査になりました。一昔前に比べると、格段に楽に受けられます。お近くの消化器内視鏡専門医にご相談ください。